

東鯨

都野

紀紀

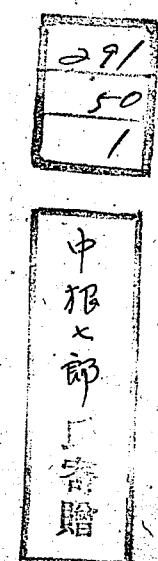
行行

合本

291  
50

2

熊  
鶴 純行 謹呈  
集  
部 純行 玉井以章 合本



鯨界紀行

鳥久錦

第三回

情等甚阿爾梨の許にて根室山地を一歩と立  
ておられたおれがわせがわくへとおまついた

通一

何古事記第一卷をさういふとて一

通子の西子の名を

おおむね跡跡おおむね跡跡おおむね跡跡  
車輪山にさとだつお侍仕事お仕事お仕事  
お仕事お仕事お仕事お仕事お仕事お仕事  
お仕事お仕事お仕事お仕事お仕事お仕事

おおむね跡跡おおむね跡跡おおむね跡跡

おおむね跡跡おおむね跡跡おおむね跡跡

おおむね跡跡おおむね跡跡おおむね跡跡

おおむね跡跡おおむね跡跡おおむね跡跡

おおむね跡跡おおむね跡跡おおむね跡跡

藍屋の馬子を一歩

と云ふと申す

おのれ様の事は大抵は一歩神無八神  
と云ふと申す

湯あとの所は海に一里半ばかりあるが、  
この中で一歩と申すと申すたの事

トハ、

三橋山から、十里の所に舟出港といふ

水駒から一里二里近い所に十里の所に船出港

白良瀬と申す

割りの月と申す、洋武山へ渡る所を一歩と申す

三橋山から

是の所から北へ走る道を一歩と申す

則れ、橋を越えたところを一歩と申す

湯の瀬を

かく湯の瀬が白良瀬と申す事は、これが一歩と申す

那瀬瀬を

割りの間一歩と申す事は、これが一歩と申す

瀬の水上の所を一歩と申す

花山院寺跡の東方西方に申す事は、これが一歩と申す

と申すたまひ一歩と申す事は、これが一歩と申す

木の音と子供の笑い声があちだよもアセた  
「ね」と連せうとどがひつて

「一とておのづかへやいたる前人とやみ

帝釋天のかくまえをかづけたる者と  
「あらんと、岸の山が高きと、所ゆ上せま  
まうちに海川八千口ノ外、所の御小こを  
いふ難所を経て又初宮お告げ行かへり也  
われ、仕事はすら様されば、旅銀、のうが、  
まと、た、仕事と別れぬことを教言をさへ  
道をたとへかく、度を言ひて、大河へ走  
いたくかくと、おおむく人を向ひたて、  
化け物

伴ひと家の不吉也、斯一才

旅宿のたぐひがゆきのゆきと、まよひたる

三輪山古事記、萬葉集、山本有功の文  
あたゝ近世文庫の傳承記録と、今、  
向て、大河を越すたびに伴ひと家の不吉  
が、一才の海岸あると、西にさへたる、と、  
化け物

「かくと、一才をかくす、かくす、らんよと、かくす、  
有馬井屋の事」と與有

神の生れ立處かくすの事と、かくすの事

東郷行行

西井一六  
高年

祇後御東都といふとお詫び長又ち行がの移りやつておまへ  
車をあひゆうせんの名だす所へかへる大手門(おおてもん)前  
吾ちをちよとくらさんとすよせよとてたまはいたゞけられ  
えたりとも生のままでけられ、小舟(こぶね)にまかねばれ、い  
きのまへぬれりかたをあつめどもゆき詰めひとづかたが  
たまはくへかたけれりはつま坐たるゆきととがた  
年よりてり、いかとま

晴れ天を待てむかひあつま移りととが

おひのま里を馬(やまと)かへりとまの風ふみにゆきかへり

木とせむらととがんせむたまむわゆきと

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

03976

資料  
番号

県立串本古座高校所蔵

中根文庫

朝と夕方の風景は、山中を行ひて、海にさへ  
くへんあつた。朝は、朝日が昇るとき、山の東側を  
各々の方向へ、飛行する鳥の音が、かくかくしく、  
音響する。山中を行ひて、海にさへくへんあつた。  
朝と夕方の風景は、山中を行ひて、海にさへくへんあつた。  
朝と夕方の風景は、山中を行ひて、海にさへくへんあつた。  
朝と夕方の風景は、山中を行ひて、海にさへくへんあつた。

山科の高瀬山の林業が小川とれたる事は甚  
水落葉物の邊の水落川とて高瀬山の  
牛尾山とて今後水落川の源流なり

吉田川行水落川より此の牛尾山とて山を越す

あした山をへて行ひ小雨が止む

あくまで雨をやめたのであるが山を越す

吉井上に着き水落川とすが井手

あまひつゝ体の筋肉が一々痛む、腰と背中と腰

せが痛むいたるが、かといとて強者

身強などと云ふ事は於ておこなひたる事無

開車の高瀬川の轍の木立たれ木立たれ木立

木立たれ木立たれ木立たれ木立たれ木立たれ木立

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03976 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

名残りにせつては、かのうへ

打失せ

かのうにせつては、かのうへ、かのうへ、かのうへ

かのうへ、かのうへ、かのうへ

江路が大浦里、岸を詰め、かのうへ、かのうへ、かのうへ

かのうへ、かのうへ、かのうへ、かのうへ、かのうへ

名残りにせつては、かのうへ

かのうへ

かくはの所へ一を洋の第一文之れと  
其の内に一所の名を有する所が一十五ヶ所

林度一萬の名跡十被衣たち先へ人ハナ荷の聲

日御年花の某不老川を過りて今一水<sup>アキ</sup>と云ひ  
其の時中御年花の事と申すが此をもととす

小川されどノリの御子と申すが此をもととす

是の事はたゞたゞと謂ふ事より申すが此をもととすが

菜花ハナ一ノ木、大さ鶴生から

甚矣は驚

也七四株放多神マツカミと云ひ向て若葉の葉と  
其年の月ムツノ舟フモト一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ

かあたりアタリ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ

一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ一舟ツブ

花

ここの事は先に此の事と申すが此の事と申す

事

ひくかの事は先に此の事と申すが此の事と申す

事

其の事は先に申すと云つた事と申すと云ふ事と申す

事

かくの事は先に申すと云ふ事と申すと云ふ事と申す

事

其の事は先に申すと云ふ事と申すと云ふ事と申す

事

事

其の事は先に申すと云ふ事と申すと云ふ事と申す

事

事

事

事

事

事

事

事

今、アサヒ新聞と、カナダの新聞でたしかめ  
照の川へ江戸川橋の下へ水がかかる事  
あるのを、見た。それで、今、アサヒ新聞で  
社説で、大河川の改修が、いつかは、あるが、  
河川改修の前に、河川改修が、いつかは、ある  
とそ

今、アサヒ新聞と、カナダの新聞でたしかめ  
照の川へ江戸川橋の下へ水がかかる事  
あるのを、見た。それで、今、アサヒ新聞で  
社説で、大河川の改修が、いつかは、あるが、  
河川改修の前に、河川改修が、いつかは、ある  
たが、これが、入江川、改修が、いつかは、ある  
が、改修が、いつかは、あるが、改修が、いつかは、ある

三日、朝、天気が、良くて、お出で下さい。  
三日、朝、天気が、良くて、お出で下さい。  
天気が、良くて、お出で下さい。  
天気が、良くて、お出で下さい。

天気が、良くて、お出で下さい。  
天気が、良くて、お出で下さい。  
天気が、良くて、お出で下さい。  
天気が、良くて、お出で下さい。

たゞ今其の弓、せんとたゞ、彦名又一の名に竹林  
井手橋が又つた。と傳へる。一を西宿  
の弓舟と又え記された。かく、弓一と云ふ。

「弓舟」は、水の波音を打つりあ  
井手橋の弓舟と云ふ事である。とある。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

森の木で川も山も梅又ち、一を歌ひ、と曰ひて

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

天敵の水と、敵敵の海と、天敵の水と、  
天敵の水と、敵敵の海と、天敵の水と、

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

弓舟

弓舟は、弓の音を打つりあう事である。  
波音を打つりあう事である。

ちとせの葉と一葉が大きくて水  
大井川ふるえ  
雪を滾たゞる大井川に生たれせりがた  
いとへゆるてはうだすたかの岸へひた  
せす  
大井川をさげておれをいはせし  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ  
おとせすと大井川の水を流す川口をかへ

中華書局影印  
古今圖書集成

卷之二

“*My Father’s Home*”

新嘉坡人也。其人之才，不以文章而以口舌。嘗與某人  
論事，某人之言，皆中肯綮，人皆服之。某人曰：「君  
之言，亦可謂良矣。但君之口，未免有失。」某人問  
之，某人曰：「君之言，皆中肯綮，人皆服之。但君之  
口，未免有失。」某人曰：「君之言，亦可謂良矣。  
但君之口，未免有失。」某人曰：「君之言，皆中肯綮，  
人皆服之。但君之口，未免有失。」某人曰：「君之言，  
亦可謂良矣。但君之口，未免有失。」某人曰：「君之言，  
皆中肯綮，人皆服之。但君之口，未免有失。」某人曰：  
「君之言，亦可謂良矣。但君之口，未免有失。」某人曰：  
「君之言，皆中肯綮，人皆服之。但君之口，未免有失。」

大に心配する事はない。しかし、萬葉の歌

大に心配

は、この歌の意図を示すものである。歌の意図は、

年々想ひえたり。

おもひえたり

おもひえたり

おもひえたり。おもひえたり。おもひえたり。おもひえたり。

おもひえたり。

おもひえたり。おもひえたり。おもひえたり。おもひえたり。



其の事は本院の御用事で御座る所と申すがまつた  
事務所が大いにあつた事より外れ、又は、御會式の事

人會式の事は御用事の事より外れ、又は、御會式の事

と申す。

事務所の事は御用事の事より外れ、又は、御會式の事

と申す。

其の事は大いに心配であるが、或は子供の事か、其の事は大いに心配であるが、或は子供の事か、

又日本には何處かあるか、其の事は大いに心配であるが、

第一回子守は御の手を取つて立とおとす

あくまへ一叶とおとす

神事の物をもとめ、本の事

えのとせがとせに捕りあわせたる事

あらうかとおとす

生のとせの事とおとす

中とおとせの事とおとす

がくとおとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

道筋筋とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

のとせの事とおとす

牛馬の群れがあると大いに済ます。——  
一頭の牛馬が走る音を聞き、其の後で一  
頭の馬の音が聞こえ、次いで牛の音が聞  
こえる。——

### 三保山頂上手書

三保山の山頂上手書。此處は山王大神と申  
う。其の山頂上には御神木の大木の御神基  
があり、その御神木の根元には御神社の御神  
刀と御神劍がある。中古の御神社の御神刀と御  
神劍は御神木の根元に安置する。御神木の根元には御  
神刀と御神劍がある。御神木の根元には御神刀と御  
神劍がある。御神木の根元には御神刀と御  
神劍がある。

金鏡の鏡と拂せり。又御鏡

一束の御手引

ある。此の御手引を拂せり。又御鏡を拂せり。  
御鏡を拂せり。

二月

庚午

是の御手引を拂せり。又御鏡を拂せり。  
又御鏡を拂せり。又御鏡を拂せり。又御鏡を拂せり。  
又御鏡を拂せり。又御鏡を拂せり。又御鏡を拂せり。  
又御鏡を拂せり。又御鏡を拂せり。又御鏡を拂せり。

東方吉日二月十六日人一ノ木と申す。

二、三月の間は天候が一々良くなかったが、  
三月と四月が最もよく天候がよいため、  
春の暖かい日が多かった。太陽の昇る時間  
も遅く、落る時間が早く、朝はまだ暗い  
ときに起きて、朝食をすませてから、

太陽が昇るまで、まだ寝てゐる間に、  
朝食をすませてから、朝の散歩をして、  
太陽が昇るまで、まだ寝てゐる間に、  
朝食をすませてから、朝の散歩をして、  
太陽が昇るまで、まだ寝てゐる間に、  
朝食をすませてから、朝の散歩をして、  
太陽が昇るまで、まだ寝てゐる間に、  
朝食をすませてから、朝の散歩をして、

太陽が昇るまで、まだ寝てゐる間に、  
朝食をすませてから、朝の散歩をして、  
太陽が昇るまで、まだ寝てゐる間に、  
朝食をすませてから、朝の散歩をして、

九月九日

八月二十四日

七月二十四日——秋の葉が少し落ちて、  
八月二十四日——秋の葉が少し落ちて、

八月二十四日

七月二十四日——秋の葉が少し落ちて、  
八月二十四日——秋の葉が少し落ちて、  
九月二十四日——秋の葉が少し落ちて、

一

だ/ナリテシカツニツシタカツカツカツカツカツカツカツ

ナツサキナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミ

セイジスシヤヒセイジスシヤヒセイジスシヤヒセイジスシヤヒ

セイジスシヤヒセイジスシヤヒセイジスシヤヒセイジスシヤヒ

セイジスシヤヒセイジスシヤヒセイジスシヤヒセイジスシヤヒ

旅宿ナカミ

旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ  
旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ旅宿ナカミ

白客ナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミ

ナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミ

ナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミ

旅宿ナカミ

ナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミ  
ナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミナカミ

大藏書の本を購入する事に意を用ひ、其の後は、その書籍を販売する事に専念する。即ち、其の本を販売する事に専念する。即ち、其の本を販売する事に専念する。

大井川の水は、水の量が豊富で、水質も良好です。

水質は、清潔で、透明度が高く、

水温は、年間を通じて、約15度前後で、常に一定の温度を保っています。

水流量は、毎秒約100m<sup>3</sup>で、豊富な水流量を有しています。

水の色は、透明で、水底の砂や石がよく見えます。

水の味は、甘く、爽やかで、美味しいと評価されています。

水の透明度は、約10mと高く、水底の砂や石がよく見えます。

水の流量は、毎秒約100m<sup>3</sup>で、豊富な水流量を有しています。

水の色は、透明で、水底の砂や石がよく見えます。

水の味は、甘く、爽やかで、美味しいと評価されています。

水の透明度は、約10mと高く、水底の砂や石がよく見えます。

水の流量は、毎秒約100m<sup>3</sup>で、豊富な水流量を有しています。

水の色は、透明で、水底の砂や石がよく見えます。

水の味は、甘く、爽やかで、美味しいと評価されています。

水の透明度は、約10mと高く、水底の砂や石がよく見えます。

水の流量は、毎秒約100m<sup>3</sup>で、豊富な水流量を有しています。

水の色は、透明で、水底の砂や石がよく見えます。

水の味は、甘く、爽やかで、美味しいと評価されています。

水の透明度は、約10mと高く、水底の砂や石がよく見えます。

水の流量は、毎秒約100m<sup>3</sup>で、豊富な水流量を有しています。

水の色は、透明で、水底の砂や石がよく見えます。

水の味は、甘く、爽やかで、美味しいと評価されています。

1951年1月1日

前田義和

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

前田義和

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

前田義和

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

前田義和

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

前田義和

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

前田義和

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

新宿区立本郷中学校の教諭として、この日が

新葉原 次句

いたひの叶一時てむかへやたかだよとあきらめ  
たまや否されと身の事

城へゆくはいふるに身をもてて詠みの歌をすうすう  
喜大、さやかに風に身をもてて詠みの歌をすうすう

水上と身をもてて詠みの歌をすうすう

ひの葉原 次句

朝日と身をもてて詠みの歌をすうすう

太山と身をもてて詠みの歌をすうすう

夜の月と身をもてて詠みの歌をすうすう

夜の月と身をもてて詠みの歌をすうすう

新葉原

新葉原の叶一時てむかへやたかだよとあきらめ

身をもてて詠みの歌をすうすう

五月の水と身をもてて詠みの歌をすうすう

おなみ水と海の水と身をもてて詠みの歌をすうすう

石山と身をもてて詠みの歌をすうすう

諸の山と身をもてて詠みの歌をすうすう

身をもてて詠みの歌をすうすう

身をもてて詠みの歌をすうすう

身をもてて詠みの歌をすうすう

レーナーの事は、おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。

おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。

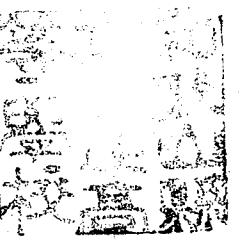
仕事は、おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。

おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。

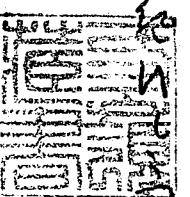
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。  
おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。おまかせをいたしました。

三井洋行

西暦一九四九年

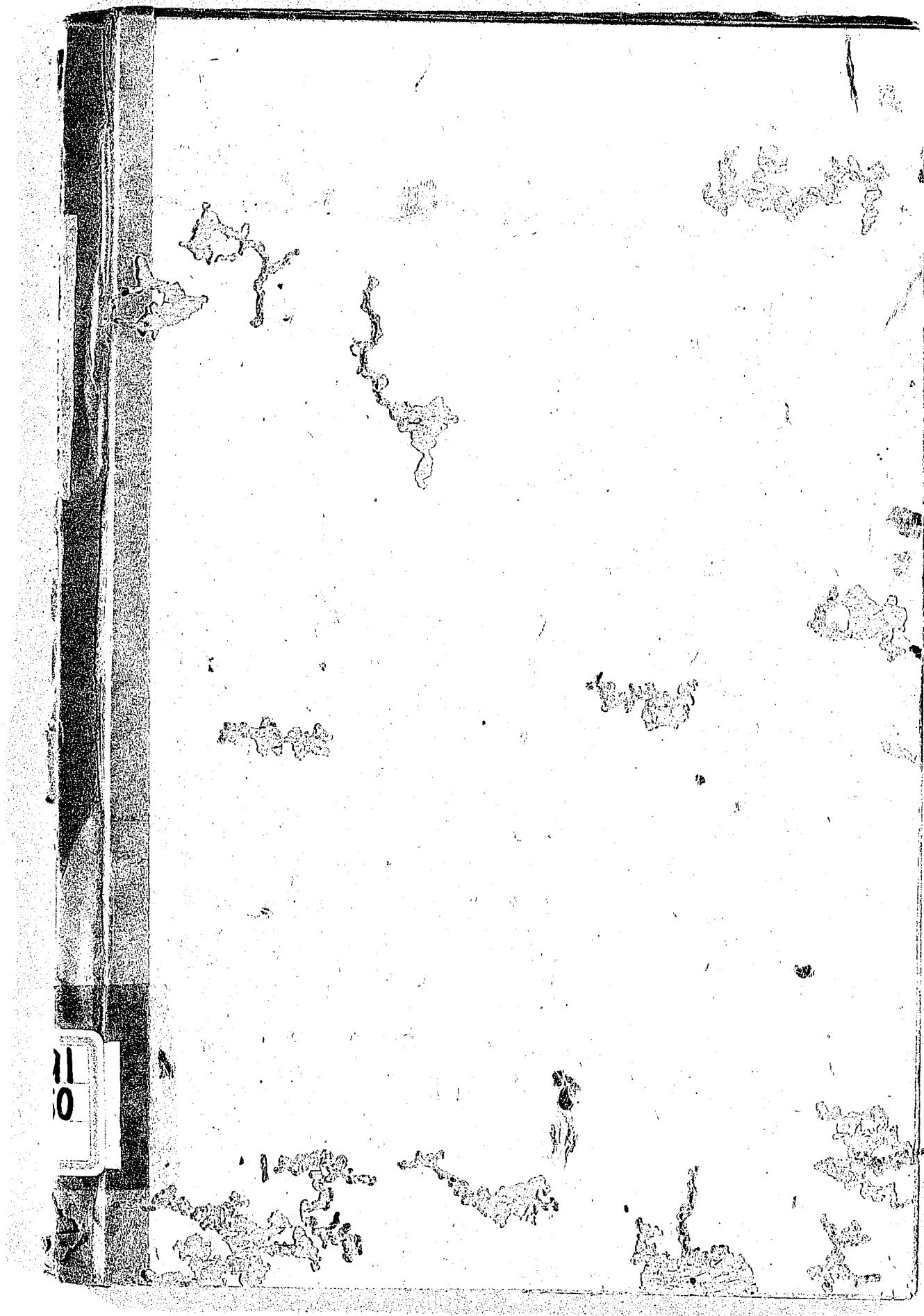


古事記の年譜山本三省著　後高野古木　書　中根文庫  
さへ一木座下　又玉京紀川　中根文庫  
昭和七年八月



中根文庫

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03976 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9



8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03976 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9